

【一般演題2】 第8席

『甲乙経』の音釈について

宮城 松木 きか

『黄帝三部鍼灸甲乙経』（以下『甲乙経』と略す）は、晋の皇甫謐の撰になるとされる鍼灸医学書であり、その条文によれば『鍼経』『素問』『明堂経孔穴鍼灸治要』3書の内容を選択し、整理して編纂し直したものである。『黄帝内経太素』に先立つ『素問』・『靈枢』の再編纂書として、中国医学史上の諸問題の端緒を多く包合する。

『甲乙経』の主な刊本と抄本には、「正統刊本」・「医統正脈本」・「明初抄本」の3種の流れがあることが知られている。これらのうち「正統刊本」は四卷以降を欠いており、『甲乙経』全体を見ることができなのは「医統正脈本」・「明初抄本」の系統の2種類である。「正統刊本」は無注であり、「医統正脈本」・「明初抄本」には注釈が施されている。両書の注釈は必ずしも一致せず、中でも音釈はその趣を著しく異にする。「医統正脈本」・「明初抄本」の性格に直接関わる可能性がある事柄でありながら、この差異がどのような性質のものであるのか、十分な検討は行われてこなかった。

本発表では、『甲乙経』に施された音注の性格の差異を明らかにし、二つの版本・抄本の位置付けに一定の基礎を与えたいと試みる